美乃一露

若葉笑

12
881
8

花宴

巻乃名の事　花　詞をとりて巻乃名とせる也此巻は
花宴とはさくらの詞八月にて御遊ありて詩楽の日かく
はくしそれは賀乃日や侍うくしくらむとありて花宴
乃巻に清花宴の賀とはりきこ文むちの巻とれ巻に六条
院の行幸此巻に朱雀院の花宴乃賀例のおもむりお
ほしめしけるとありけれはそれをとりてはなれて巻乃名
とせるとあるのことあそれをうゑ伊勢物語禅泉よ花宴賀
とさうしめてへきにはり又桜井の宮よあちは花賀主語
とありと文雪の賀といふはり萬和乃清の時花宴賀
ありとあるて事なるとこれは此日を祝とせる也此巻に
八源氏二十十七歳乃十月なりと明年此十月迄のよみ給ひし
ありと嵯同之河　朱雀院行幸花宴陰也此名字頼不見ん

巻中に花宴あるを紅葉賀といへり此名目は秘事也

細 巻の名此巻に紅葉賀といへる詞あるまじ花宴巻のうち

元の二乃巻に此時のことを紅葉賀といへり心あつくつゝきたる

花あるによりて又非人の御賀をと怪みたるにあり賀と

云其年のみちぬる紙賀にして行来れ賀算を行也

天皇の御賀ハ仁明天皇嘉祥二年三月庚辰興福寺

大法師等為奉賀天皇宝算満于四十ゝゝ又十月癸

卯嵯峨天皇太后遣使奉賀天皇四十年宝算也凡厥

山海珍味穀百種既而天皇御紫宸殿賜宴楽遊及禄

乗絃目ゝ太政天皇の御賀ハ淳和天皇天長二年十一

月丙申奉賀太政天皇又八之御齢云是始也源氏十七

歳の十月よりは十八歳乃七月迄はありしも河内本十月まで

てまたあるを花宴用之説也

花細同　宗　春あるは花乃賀秋あるを紅葉賀なと言

ハ雪の賀といへり也別賀とまいふハ年四十よりはじめて十ごとれ

る時その年にれ御祝ひ執行ふ事也なとよめる詩を

作りて奉ることへ此巻ハ源氏十七歳乃十月よりは十八歳

乃七月迄ハあり花宴ハ二十十月迄とみゆるよしいへく

朱雀院乃行幸ハ神無月十日あまりとありよの註あり

まそねりし誤りなるべしこれも乃よりありこれん

河　延喜十六年三月七日辛酉行幸朱雀院太上皇又十の御賀

同年八月廿八日行幸同院賜詩題翫秋韻　康保二年十月廿三

日行幸同院翫花葉共舟遊　朱雀院ハ三条朱雀也是後院也

古とを集朱雀院とあるは宇多院渡りましし也脱屣乃後此

院ニ渡座故也　花此朱雀院の行幸ハ宇多の御方の御

賀になぞらへ御ゑ世にいふ故ハ延喜十六年三月七日行幸

朱雀院宇多法皇五十の御賀なと醍醐の御門の御時朱雀院
にてありし也寛平法皇の御事なり五十の御賀ハ三月のこと
なるを此物語に十月の紅葉の比に云なされたる也 此巻に
に一院とかく事あり別寛平の御門にあてゝかけるなり桐壺
の御在位の中に一院崩御の事見えし所あり寛平法皇
ハ延喜の御門の崩し給ふ後にかくれさせ給ふ也
新 宇多法皇の御賀は延喜の御時なれハ一院に比しかたし 但必五十
賀ときまれる事にあらすと云也又垣代四十人の数也 説々不同也
五院の御賀は心得へし 朱雀院ハ三条朱雀にありと云
朱雀冷泉の御事をおもほしたる御心のうちにおはしましける院也
細 花宴に桐壺の御法あり宇多法皇の御賀三ヶ度也朱雀院
ならハ前にも源氏の古今に朱雀院の女郎花合とあるも
宇多院の事也 新古今 河海 康保二年十月とあり時

世にはめづらしく 宗 朱雀院ハ三条朱雀ニ四町ア
りくて…と云り朱雀院とハ寛平法皇をさして申し
又陽成院をも申也云説在之行幸ハ桐壺天皇五十の賀
の御為也
清らなる物見給ふる事をくちおしく思ひ給ふへきを后宮
の見給ハぬをあかす思さるれハ 細 禁中のかたちの紋
又禁中にて后宮ハ見給ハぬ事也
試楽と申事ハ御前にて試させ給ふ 河 御賀の試楽也
花 御賀の前に試楽調楽なとゝいふ舞楽の事也
也此時の試楽ハ内裏にてせさせ給て后妃の女房ニ
見せさせ給ふ也
源氏中将青海波をまひ給ける 河 南宮譜云此曲ハ承和御時
大納言良峯安世朝臣奉ニ勅命ニ作ニ此舞ニ一時依テ勅改ニ成ス

盤渉調ノ　弄　輪臺ハ青海波乃序也　破を舞あり
孟 あんして舞といふハ事ことおもしろくして舞とも也
かくてみかど大后の殿中将かちらうらいへすへてとるをと
細 舞のあひて也　孟 と一ヶハ頭中将との事也
さうちなうひて花の影にいれし山木なりとは己の日う
けさやかに詠しるよくれて見すさるを頭の物ましろき程よ
弄 よりかけ花乃かをきそしれ常盤木のやうにかんしまへ
とさて仲忠大将をむまたとへ仁寿殿乃女御の院に見えを
常盤木まをとさへぬるなり也　弄 山木と物しろうき山
也　細 花さるふうつかはしまるとは頭中将とはいろさふるく
ハるきれとも源よ云まして見ゆるも山木とは面白き心
あり　孟 さのこおもしるるにおもしろきそのまち紀
ちるへしうつの物語よりやうにをとるへるをと

おもしろはの色あしつさはりにちをもつことぬいかなるなり
孟 おもしろいとおもひ見まうするかや
忘れるさし錦くる　細 青海波乃錦也　孟 まひの手そにある
みな錦曲のそのあるへし　河 小野篁朝臣作詠曰
桂殿迎初歳　桐楼媚早年
剪花梅樹下　蝶鶯畫梁邊
舞ねる衰來　青海波 衣袴　文小菱
これやほとりの清かきよらかの御なまめかしきとみえておもしろ
たまなるるにみとるとのことのさひ給ふ上達部みなちとなみなき
あれ錦ぬ忘いれそで袖うちあかし給へるにまちちとりな
かくのふきさらしき給に
河 聖主天中天　迦陵頻伽声　法花経
文句 頻伽在穀聲勝衆鳥 云々　或迦陵頻伽

私 かまへてさんとハかゝるの花やかハこの中よりもめてたき心のいつれ
のかるゝをも撰まうやうにと弘の説法の色まふたゝかる也云々
かゝのことあひまかりて侍りるをもひとゝ申さんと給
栄 楽(ガク)の時終曲し給ふに皃(カホ)のまさりてあらわれたるやその様を伝
春宮の女御かくめてたきにつけてもたゝならすおほして
細 弘徽(コキ)殿(デン)の女御なり
神なとの空にめてつへきかたちかな 河 大鏡(カミ)云 いかなりしを
何しとにやりて 延喜 同此の大井の行幸に上ミノコウヂ小路云々や
もとの法わらしの親王れ七条みかとをさしつかはしたる
里のかすてうちすくれ給ふ人をしれぬ人をほしさり
こま法ちらのひかるやうにうつくしうをかしきをほしけり
八山神めてゝあとりなむといふ 細 大鏡をひきたり 河海同
うるて様なしとの給とひへきは女房ちゝ心うしをみてとゝめ侍り

細
うたてんの女御の詞也是ハ源をかゝる山神なとをとられまほしき事
をあれとし此詞也 栄 とゝくうれ此女御の詞ハ猶さまあしくいひて
さやうなるをもあやしとのたまはするそ様てしきの詞なるへし
女御ハ宮ハ物をしる心なくてましくハましくてめてたく
見えしをうしやわかれハ是の心うちうすんし給ふ 細 宮の心
をしりかれるかしの御しかそをもも青海波ハ源也
いつまし此密(ミツ)通(ツウ)の後ハのうくハあ法めてさく云給りんとも
宮ハやくて後との御あうなるを 細 云ハ青つかり也
をよふ乃志かくハまた海波よそにとみなつきぬやうに見給ひつると
思し給へし 細 勅(チヨク)定(チヤウ)也 栄 天子の御詞也源乃詞舞ふて
をりみなはこさぬるとの詞也
あいなう法いう人寄せくなそて 細 青海乃はらんの相ふてまさ
色みくしし給也

さとに侍つとたうまし要なしと行　河　職也　細　職なることも
かゝるこそもしはしまはしそ見えつれまひのさ度てはらひ
なむ　細　勅定也　栄　天子乃諸詞也政中将もこの心へ
ちかひほとはめ給諸詞也
家乃こはしとれるこの世ゝ文紙に限まひの御乃そのこと
とはまたいとうしこゝれと　花の　河　良家の子也花族
其は神無月ゝ朱雀院の行幸あるへしとて舞人な
と申むこととするに家の子とも也しあり　栄　花物語第七　東三
条院まひ人の息乃子のうちさた事ともやうくまゐる
ほとに殿の君たち二所いまたわらはまひ給ふ松殿
の御子の此入道納言殿もまひ給殿のう人乃御子のれた
り兼遠うちまひ給ふといふ　えらびし是ハ一家の　細　堂上乃人也
栄　甚人乃子ハとある事也

さてしうあさめてたく侍もとゝえあん見えぬ心ちそれ日かく
はくしつれても君なのゝをやはりくし食也とてと見んとをりん
の心ちくらうはせ給をはつるると中し給　河　古ことにの儀めりし
ことやあるひハ巨ゝ勢篇去たこをとく人も大人の体たるさる
るやうたまるん也　細　巨ゝの字也　栄　たゝやうなるといふ
はとめて中将の君の御のはいかゝまいん　細　翌日源よりとの藤壺
へ乃せうくや　栄　きのふの時明日早朝に源氏藤壺へま
ひのことゝいふ御使ゝしまむとそことの中給也　栄　藤壺へ密通ハ世うり
ようふきしぬみてるも心ちなりしこそ
志しぬとやみたてるも心ちなりる舞給との御文字なるへし
物思ふに立まふへくもあらぬ身の袖うちふりし心しりきや
花　源氏の哥ハ藤つほへこさんとも有らしくとゝもふ乃うけそ
たゝ御前にて見んもなましを行へきとぬとをしかるにて

とほくしてなまめかしと云ひ得し心にはいかでとも思ふことも多かるを
おりしもせんかたなしといふなり　細　源の歌のかへりは猶おもひ
それもそのへきさまかりとも哀ともいふかたる心を
なりしを後へこさせとめとありしゆへに深からぬのはとまりもの
てとほくしなとやさやかのみならず袖うちふりしとはそのうた
をいふなり　宗　源の御歌也思ふまじひのみならずかれも
哀とはけしきとのみといへば歌さやとのみなり
あれかしこそあるけるなり　宗　哀とややましひは語細也
めとはやありしはさ海からたに見ん語ものをれをやなきさん
宗　はやハ文(モジ)也錦(ニシキ)なきの文とめみ見ん給ふとくいくしき
也　細　平生(ヘイゼイ)ハそ海さらの法にてなるを思ひつしにさふ
ハ法也のはるそ昨日のまひとさとくひおほくおりしろく思
語しゆへふてそのまゝに此地のさとしるなり　宗　源の昨日の法

たゞちと哀のはじめての語はもろこしの文字(モジ)也
からくの袖ふるこそとは思ひしかそれとうちつけにまきし哀とはいひさき
河　たゞいにしへからくの袖ふるなどを哀とも思ひけれと彼のたち
ふるまひとはみなまひのもとからこそ海にはならぬところ
事勿論(モチロン)也細かなる説なるにからくの袖ふるとある也
花　青海波(セイカイハ)ハ盤渉(ハンシキ)調(テウ)唐楽(タウカク)也からくの袖ふるとよせ給ふ
にほ遠ちかからし　弄　からのがくなるによりて花なる所と
ほりなるしたるにもちかなれとも今源氏の舞給さ
海と哀とみえ給へる心也　細　青海波ハからくの舞也
まさにこのみにもおかしかるれハあらゆるまし昨日の源の
舞給さ後たてひたすら哀にみえたりしにうしろしも也
宗　哀まやの哥也楽(ガク)ハ此道と唐よりのちをもろこしよりも
ろくしとぞいるとみえられはりちて舞也おもはれたるをせんかいはも

もろこしまでひゞくや　もろこし人の袖ふる事ハとを
きものなれど源氏のたちゐを哀と見給しとの心也
おほかたにとあるをうけさせ給ふりゝしく　河海の詞よ
おりをさなれば心ろあらせてましてめでたく見え
ましとありされば大かたにハ義とみるさと云心也
細　大かたにハおほしめさぬや河海説ゆへ　栄　下の心をさなく
てたゞおほかたのことにてあそばしたと云心也
みかどのことばハ后たる人のことばと云也　細　后がくハもろこしのかくの事
をよくしろしめしたるを云也さてこそ后ちかき詞也
うちと源乃心也
人のみかどまでおほしやられしとハもろこしの事
もと思まれてちかくやうにもきこしめけて見んなれり
花　人のみかどまでの詞ハからんとの事にはさそへてくら

くひなるの心ハ何かしもむことに青海波ハ唐楽なれハ左右
乃楽のうちをめきと思ハるゝを以てかくの袖ふるとハよ
み給へると源氏の心をさして中やうれらきも也へしとくし
かしぬと其詩を詠め給へる也　細　人のみかどとハ唐と
云也后詞とハ后の下地也　弄　后のきさきのもとにかくやな也
一段女御之弘徽殿女御はかりも中宮になるとをなり給なり
后のことと心得るや
栄　唐楽高麗楽まてをとくしろしとなる意を源のほめ
給ふ也后のことと云給ふ気象の詞也と云心也
行幸にもみえたちなるとせる給ふ人あまたはかり給へり
細　此ように行幸の御南白也
此宮にとおはしまし時ハわつくれるのことなどもめくりて
花　延喜十六年丸三月の法会のよ式節　令嬢ニ皇太子ニ

此时太子ハ保明太子也

まろうどたちもなくしあるまじきひとを程なくなほりかくれて

えはくものをとせ給ひし事 河 唐左 高麗右 天平十一年

冬十月皇后宮維摩講経日供養大唐高麗舞楽

音楽冬の唱此言詞万葉第八 細 くさおほかるまかへそ

様くわかれ也

一日の源氏乃詞をゆくしうおぼされてみまこそゆかしきと

ふくませさせ給ふをきく人もおもしろきことにおぼしけり

なるに 細 もろくの神ある事を定めてつるにとおほしけるや

ゆへに講経をさせ給ふ経也 宗 源のあやうに

奇特なる法をきこしめされ神とめでたくおぼしめしてこれより

いのちをのばすにて法華経をよませ給ふとも

春日の神詫にありしとぞ申しつたふ 細 弘徽殿也

八かう経はゆくへなき心経也

ゑるらあると殿上人地下も心とゞめてあるべきと世人まで思はれける

宗 舞台と垣乃やうにめぐらすの所也海波もありそれと

ゑまうると見る事中にくまひ給ふ也 堂上地下おほし

しるゝや何もんてとまよ上手なとをえらぬ事也

いろく此のまるきとくの色さを給へり 河 有職也

有職有識 細 よろしき人さく人なとも也

宰相なるとは奥の簾をとさる事を大かたくれるなと

なまひの所ともちると世ふる事くなとのあるまじく

細 系図乃様ともちるなれもろく人ならゝ也 宗 左馬頭右

馬頭此四人は事にれぐの事ある也

とのゝまうこりて見あらひある 細 此頭とのききらこと也

またうきう蒸乃うさに 花 色よりも法文の白れうりとつりける也

四十人のかいしろ　河　長秋(ナカアキ)卿(キヤウ)筆(フテ)譜云四十人之内有序(ジヨ)二人被(ハ)
二人播(カイ)代(シロ)卅六人也　細　四十人のかいしろやうをこゝろえてかいしろ
はとりわけても四十人の内楽をならへてうたひてかなてたる也
いひしらぬ吹たてゝ物の音ともにあひたる　花　此楽(カク)に
楽ちるともおほつかなしとも思はぬ聞くハあまりことも申すや
すさましく　栄　四十人のかいしろの中に楽人あるへしや
山の松風まことのみ山おろしと聞えて吹まよひ色々に
ちりかふこの葉の中より青海波のかゝやき出たるさまいと
おそろしきまて見ゆ　花　朱雀院に池山ある所也
かさしのもみちいたうちりすきて顔のにほひにけおされた
心ちすれハ　花　まひのかさしとハ人ことの木の
枝をも折又ハ花をもかさしにも菊をさしかへある
とあれハかさしの物葉と申すなる　細　さの字すむ也

おまへなる菊を折て左大将さしかへ給ふ日くれかゝる程
にけしきはかりうちしくれてそらのけしきさへ見しりかほなる
ほとなるにさるいみしきすかたに菊の色々うつろひえなる
ぬをかさして　河　菊挿頭(カザスカレニ)事　後撰(コセン)云女八のみこ元良(モトヨシ)の親王の
ためにに四十賀し侍けるに菊の花をかさして　参議(サンキ)
伊衡(コレヒラ)よろつ代の霜にも枯(カレ)ぬ白菊をうしろ
やすくもかさしつるかな　栄　花抄譜云治安三年十月十三
日后のうへの賀也かさしの花ともことゝ白かねの菊也
花をかさりて此花金ろさしたるさま
右大将　細　系図(ケイヅ)よろし
なかきにみえてとはかしある　細　試(シ)楽(ガク)のうたを又一々さんしやう
へおやの御ほとをこゝろえしてこのよろつとも申すに
花　後(ゴ)涼(コンジ)寺(ライ)郭云二村山と見ぬ人へおやのおほやけはしまさ

舞と照(セウ)照(キヤウ)云舞ふへ入あやとて侍しにとてなして
おもしろくまさるにもまして时あるの入あやのいやは侍る
やよめるも云ふ所の栄光を上云楊本書紀にらくそんの入
はやと舞と有六条院の法楽のまなり也
物のくし舞まうしさしも入るとの本乃まといふもかくれ山乃末なる
にしかもれたる法へまとへし物のんまうるはあまさまさしきなり
細 おもしろくさき程也
承香殿の御はらの四乃宮まだわらはにて秋風楽まひ
給へるなんさしつぎの見物なりけるこれらにおもしろさの
つきにければこと〻にめもうつらずかへりては
河 秋風楽 盤渉(バンシキ)調 弄 女楽にこれを舞ふべし 細 桐壺帝(ミカド)法也 六具(グ)
ことさましにやありけん 細 おもしろきの面白ゆへかへりて興
をさむるやう也世俗(セゾク)云ことさまし 栄 源氏の中将の四乃

済まさるとの法舞云地の楽の庭くさとほまし給との
人も目をさましたる也
そのよ源氏の中将正三位し給 花 延喜御記云貞観八年某
賀時有叙位之例
頭中将正下のかゝいし給 弄 正四位下也一説 細 叙正四位下也
栄 正四位乃下とする也かくいふて加階(カカイ)とするは官をよろこびする
賀乃時叙位行幸あるとの時例有之
上達部はみなさるべきかぎりよろこびし給ふも
栄 諸官をよろこぶとなり
此君にひかれ給へるなれば人の目をもおどろかし心をもよろこ
ばせ給ふ 細 源氏君にひかされて各昇進(セウシン)ありしとの也
昔の世ゆかしげなり 細 源の前世(ゼンセ)乃ゆかしきとの也
宮はそのころまかで給ぬれば 細 藤壺也 かくてさま

うんでや致べし
思ひのひまもやすからぬひがりきなと　箋　源氏乃春悪と
うらみ給ふ也
おとふく　箋　葵上へ此はうをお紀なるをとぞまてまてさえられ給ふと也
御はいとのまをかすれれ給へとてかの御まへりうとな給て
しと　細　葵上乃御事也　河　まてさえうる給也
二条院まてへむくへ給へるなりやん人乃心のゆくかれなき
細　葵上のくわしさるをと考ふる人とハ葵上のことぞて侍るは也
ひとんはさるのみぞ御ほいへるを　箋　葵上の御心也
うちつくろひさ給ふ人をりの給ひはさるもおぼさん君とおもとつりかされ
孫　葵上の御心さまるすを葵上まつを給けと也　箋　葵上はれの
御心くしをまたれ乃人のやうにうらしとの給ひてまをもうちうつく
うちかなるをうゆみくさをみ心のてもんまのなとおもふ御はりのことと

つきるの御は給ふ心つきなさに侍ると思ひまへしさをこれてむとまた
くりかへし　弄　匿悪なるべきさんかうつくしかる也
細　葵上乃性と云也　ちからうちとも侍りやうに平生乃まき
給ひの有也さやうにおもとにおるく御他人まおもく給へんと御
ましきなとゝも也　匿悪なるさん也と給ひうくねさ侍の
ある也　箋　源氏ほんや葵上の御心此人のやうに御なるとも
人はさくの給ふこと心をさにあるもまくさむへさと御なるとも
まさしやうにまうりしてまちうらみ人給へんとゆるしぬへし
ともしてく給ひとゝも也
人乃御たをいふのみなりにまうまるとの御ゆる也お御ゆるさへん
ともるし　細　葵上の御心ともまへるひよるまうとの給ふ也
箋　葵上子をうまんまでもうまさえに瘧あるとのましく御心
まつる人にさやうならひとも也　同源のまへる也

人よりさきにまいりそめてしうえあはれなれは御心とゝまる
ことわりなる　細 かねてよりの御事なりそめしはかりさくをも
心をおきて給ふ物をとも也　孟 いりまいの源の思人なるをも
葵上ハさきにとも也
みとも立つる行ちはほとこそあるめは弘徽殿はあはれしる
ときまゐなんとおもてしをかうるくしうしぬ清ん乃はとゝもと
のつゝし世をうしのまゐるもかさいかにとなりあるき　細 はかりなき
思ひ細の給へ人ことにてそれうつるまとも也　孟 源氏乃御心
と葵上よく思ひし給ても也
わさなれは人を　細 これよりも葵上乃御也
かんつ給ふまくにいとよりは心待つ多くちゝかくはんなるくも
まめやかに内給ひてとのゝ内乃人かたもてなれともてなし
世給ひしあ　細 見んあまひ給とも也　孟 葵上乃源氏をあつく

んしたまれたちきとみつは給ふとなるはひまのみえはかるも
ゆかれいさかはりいたれきつひまるくしてはかれを御為に
御とおもしてはかりいのおほえもしとるかし御もちたまひて給へ
あつかむとるをもしのちて　孟 たしのさいかるとかくる
ともうふたるへし
ときはかありある清むまとめと笑ふく給へてんやうかそれ
乃し給　孟 宮と人もよお乃えたるとの御方に源氏のよ
そまかそし人給ちとくにあいかひ給とのみ也
まんとゝあもきりしるとゝうし絶てとにかわちゝく心まとみ
うくもはからまつりを給　孟 政ハ執政ハ前まる北清勇と
つらさと給あり家司ハ人言くきまかれまうのをもは紙はう
きとうるやことにいうちてとハ別くとるまよ花心えんあう
きて給ひはらまつるとも也

惟光よりも御けしきのことをいひつかはしたる也
細 此かの事をきゝて人をもとむる也と也
かの父宮もえしらせ給はす姫君は行衛しれす
といひしかともいかにとおもひ給へりしをおほしけるを
父宮 細 おほしめす也 栄 紫上乃父宮也
君乃御心にまかせ給ひしよしかなとも御心にて
そこにものし給へ 栄 源乃よそへとかくしおはしける也
あやしと此事をもとおもへとかくれしを御行へとおもひて
えしらせたまはすとおもひしかとも行へり二三
日内に源乃ひそかに御わたりになりしとおもふ
あやしとおもひとまらく 栄 葵上法皇にもとなるへし
くるしとおもへと心にかゝりてうちなけかれんとも
してありしをも君のおほしおもひしに 河 君 栄 云々

しはしはめてよむへし
僧都はかくなんとさて行てはやしきおとりかれしとなん
おほしける 細 源のうへ大切なし給と僧都はいかにしたまはむと也
行給也
かの法師まちなし給ふとなりにしかうとおもひて給ひたまへりし行へり
細 紫上の祖母(ウハ)乃法事也 栄 尼君乃御とふらひ也 紫君
とまらくと右ゆん成へし
故按察の北の方へ 細 源乃御後見にとある給也
三条乃宮は法花の申しうて宮乃行へれ也
栄 故按察乃御里也 前に見えたる也
命婦中納言君中務なとやうの人々よしあしめるを
命婦中納言 細 二人の名也
あさやかにも見てたのしかれとおもひに給へりとおもへ給

てならひこの物語せちにおはせしとは　河　清（サヤカ）　万葉
細　あまりにおほけなき心をいひ給へる也　聞　源氏乃は
おもはれしとも命婦なとも隔心ありけりてものを
もはなしとおなしく物語し給ふとなり
藤つほの宮にまいりつゝ　細　藤壺乃兄（キャウ）兵部卿紫上乃父也
この君おはしけるをきこしめしていつはりあるとは　聞　源氏の事は
数ならぬ身にてははかなきをおもひ給へると
おもひて藤つほの宮にや　此君　細　源也
女みこをかしつきたまひて人に見せ給はぬをも
細　なつかしく源氏君をみえたまへやとや　聞　藤つほの宮をも
えはなれぬものを源氏乃はらからにや給也
かくしてつれなくおはしますをも心もとなくおもひ給へると
たゝかつらいてことにおもふほとおもひかへりて

うちとけ給へるとはいとめてたしと見えまいらせ給ふ
此　源氏乃心はなのうへくもりてこそ　聞　藤壺宮乃
御心をもしたにおもひくはすへしとまいりの御事也
むつかしきをも思はしうてをかしく見えましやと　細　兄をも
女みこをかしつきてとて源をもいひかたりしも紫乃上のうへなれは
思ひもよらす給はぬ也
いとめでたき人をみたまへは　聞　源氏をも女みこはかなき
しれものとおもひの御事とも思ひ給ふとも
御前にてみ奉るものからいはれぬ思ひをかきくらしてたゝ人の
御ゆかりにいとをかしく思ひきこえて物をもいひ給はし
とおもひ給ひて見給へるをはしたなく思ひて我もおもひしや
細　兵部卿の宮をもとに御簾中に入給也　聞　兵部卿の宮のうちへ給
と源氏のいやしき給也　此人はあさましきと思ひし給は

あまられたる人はゝくみて蓬生のつゆもしけくしとしてハなやうに
うちえ給ふ情ありつるもされと是非へもとまりあるへきと
思ひ給ふ也
まてしくもはすへき人なれと　細　源乃詞也
おとろともいとねはとやとのつまをこゝろと侍るとはる人
をかゝるを思はるをも侍らんまてうまつるとあると
箋　源氏乃詞也さらひくに事へんまれとも侍しらる
をも侍らぬ給へれとさるを給ふとも侍る人をは侍国あるとお
らたく侍つきより令嬢よ結垂く出給也
まくりしくそいて給ぬ令嬢をうちたてまつるとふかくとんとなる
くいやの侍きしきもいとゐまうと八いとしう紀かしに初ゆ
とさてんとゝもある注等しきをもまつりつるいとわしくあれ
まちるふの志るしをもるすくてまた紀ゆく　まくりくとき

河　健(スコヤカ)やかなる同也　箋　ちとはあるとあつはつ也
まうれ乃英りやとおかしみてゐるすかきとにつきてれ
細　源のこゝ也　箋　源氏と令嬢とはさきをいひて也
少納言ハおほしまておもしさより紙も見るなれこれも故尼
うゑの此給ことをおほしあは侍をこゝろひつるもいのあとこさと
え給ふし紙乃給まつるしすやとおほゆるに　細　又是より出
箋　上乃るすとうやうに源の大切なし給ふすとこう
紫の君のあれとも乃んも思ひはまつるへきせすともおかよ
とさくいまのやうなるはとんてはめて思ひるまと
おほいとのいとやんことなくてわうし　細　葵上也
あくらしこあまさうくはしひ給とて　細　六条のこやすとと
こゝろあるとも　箋　こやすとも思へつむまか源氏乃侍んと
うき給へくれ事也此段ハ上少納言よりんあるへし

まことにおとゝうひ給へんほとはむつかしきことのまゝやとおほ
えたり　細　紫上成人(セイジン)のことくはもてなしきこゆへきにや
源氏の心かくとありて紀伊かたる法けれとの詞ハいとこのまし
をかたりし　細　ことのまゝしきこゆしや
法ふくなとハ三月にてそハやかてはゝきみにぬきもをはりと
河　物忌(フツキ)令(リヤウ)曰(ニクオウチ)祖父祖母(ウバ)父方(カタ)ハ服(イ上)廿日服(フク)五月母方(ガ)ハ服廿日
服三月　花　紫上のうちくハ九月に卒(ソツ)去(キヨ)母方ハ三月の服な
るによりて十一月晦日除服(ヂヨフク)し給也　私　紫上祖母逝去(セイキヨ)
ハ九月廿日比なるをさ九十日ハ十二月廿日比成へし晦日に
除服とあるへきことえしかれ給はや　細　花ゐる此除服十二
月晦日とかゝれて九月よりかそへられて十二月よ及ふ
をかし給ふ十二月廿日ころ成へし未は男君ハ給はする事なり
給ひとあり十二月の服也　私　花ゐる十一月晦日とあるにつく

次乃詞なくなるへし
又おやもなくておひ出給しなりとおもほしまさりて
それおほむけしきは山里のちの事をおもはるゝ法なり
ちかきことをおほしつる法ならぬめでたしをなし
あまあり　花　紫君ハ母君にそひてまかり給て祖母の
喪(サウ)にくはしまししをおやともなくおひ出給とあるへ
つかへし三月の服なれとも一かと心さしのほとをあら
はしかはむつかしき乃出きにもふれたまふやうなる
やいつちりもてなしを除服ハし給へとおもふさへはまたる
ことゝと服(チヤウ)しきぬや鈍色紫を除(タキ)てよろしき
き色とをかゝ生絹なへさたるれたる梅もこれくち
たえの梅桜なとのあるさぬなといへきにや
細　紫上ハ母上にそひやとふれまたるゝ昔祖母の喪(サウ)

影みくるしき程に一所と照ともなく見え
し給へるよしを源の心なり也河説也くまなくゆへに
出ハうすき成へし 私 まかせゆきてそらをながめてと
ハ紫山吹を陰也
男君ハ 細 源十八歳也
朝拝ニ参りとて院のかたきなりへ参りまかりけれ
しく細殿のやとて 河 朝拝 朝賀也始自神武天皇二年 小朝拝延喜五年被停止也
同九年又行之 花 年始て源ハ十八歳ニ成給ふ朝拝
依拝は請也
ハ正月一日也小朝拝清涼殿乃前庭ニ諸臣拝之
花鳥ニ云ん也 私 花鳥余情云朝拝ハ正月一日の小朝拝を云朝
賀乃みにおいて小朝拝ハ朝賀の略儀也其後次院へ
参給とあれとうるや 按段記向へ参給と親族おはす
と云也小朝拝乃御前の字清ハ二条殿摂政也

紫 朝拝元日以内裏へ御参礼也
うちへまいり給へるにとめてうちやうちかまつりにい
しきかなもしきて うちまいり給 細 源也
そこさる給へ陰 河 そくさそあくや
二人のみかとしひとよ給ひをきこれくさつむさ入あまさちへさしやと
色ゆくりさおつめてなまら給へるを承をもとに河そのひとふさを給へりきのや
らうとていなこさうこれとちうからのこれハはくろひ物そそて
細 紫上御也ひとくおの追儺也 私 追儺十二月晦日ニ鬼を
なふことをいふ除夜ともいふ也儺ハ鬼やらひと
云追字を厲しかとうむ也又儺の字を鬼厲しひや
誤也禁中ニおいて此法家ニ行之也三体詩題宮詞
金吾除夜進儺名画袴朱衣四隊行院院々焼燈如
白日沈香火底坐吹笙 心ハ金吾とハ云官人大晦日

秋鬼やらひせらるゝとて絵の紅梅の褐(カチ)赤(アカ)き縫(ヌヒ)
をきて四つ目ありておそろしき形也院の灯ひろれと
し院の火焼とは彼ひるかへしを焼也筆はかきちて焚
役(ヤク)するともに嘲(ジヤウ)するによりて坐をなすと也文選ニ坐(ソコ)す筆
と咲と云事紅坐して可然と
いとちかき世の事なり　栄　源氏は紫君のうちとけたる
姿をはくみ給ひて今をさかりの春とてうつくしき人は心ならや
あまりいと心ある人の心わさなとも給ふ事にまはくみたまを
侍らん　細　源の詞
たちまさりと思して花をたちはなれ給ふとて　細　正月一日あれたる
此程なしき石せられとくへくもしに出て見あまれは姫君也
出しいてゝ見まゐらせ給ひて　栄　源氏大内へ法楽のさ族也
心ひかの中に源氏の君はゝくみひたそて内にまゐりしせられ

とし給　栄　源の内裏へ参り給ふをひつかけて出給さ族也
おさなくおはしましてとひさおほしけるとおもひそめける人は/ひ
いかなるそひはゝき侍る也をとかく法おとこちをまゐらせ給ひ
行てはかなくいへかしうちなみやかなくて見なしなりなと給は御法会
しなかりとわきてまいらせてせらるゝをかゝらぬを給ふと花納て中也
そなたのうち心はまゐらせてはなくなりしと思ふことをまらんとてはへ
細　が納言の詞也
人のうちに我はさておとこにおちまうて見えては人との事とと
てはるかなる人くさてそあはれなるをかくしまたらん人を
ともあるきもありけれと今そはなれりしたるもあるさにへいと侍
とものひそよろしきかなると　細　末上の人也
かくあるさまなれはひゝきをとむのとくにかられてたるをはいとのうち
のかくてとはなかしもとけひかれとはいとかうせつかなり給ふなりし也

あへんと思ふ方のあるもちかうまさる大庭にまかりて行へれハ
人やうのおもさあれハ人とハ人をとりもちかたうめんと法る也
また御孫の心をよろこてとりしさ法さ故みなくんならむらしさ法
なしみをもあなくろうしきれハ　細　葵上の法まり也二条院の人
のことゝ下心よりの事を給ふゆへ也
さとしよろこひもとこして世はさてゆく夫の給法ん心ゆしハ
くはう給ふかむかるを宮ゝ行へと　細　源の詞
わさと人もみなくうしつさ給と宮ゝ給りよろこひハ庭んとれく
給ひ法とめうれ成ことはくそいそとん心のことをかれくいとくうと
まなつしなを　細　二条院よ人をみてとさ給はらしきは
よろつさたなく我らとこと行也
給ひさる人し　栄　見さと人をみてゆくつさ給よろつあくま
てそ草子の批判の詞なるへし

きなて立ん君しぬやうにまてなりてみるれあり法をさとひま
かくても心つよく法法ハしくかをとうちうまて行つるはいおきん
よる事ハいとこゝやあり　私　葵上下心わかりて心よりし給法
気色を源氏しもてかくにまてなりし給よし也　栄　葵上
の源のは思ふもんへとさき行つるとよろまあつうきれしとの
やうよ種種をとる法を給と也
よろきなろまとこれのこにおそらともまた打もそくしなるし
またはるもまとうのかりて見ゆる給　細　源ハ葵上よりまさ
四年なる事やとう給と也　栄　源ハ十八葵上ハ廿二也
うちもそくし源よりまは法年たかる也
女ふ事ろハ此人のあらぬ事も物し給ふ系心のあまり事をもし
くしぬをさひはやかくうしくこられなまらうしやおほしきつ
給　細　あらぬハ不思へ也　栄　源の法気かる也

おほい大臣とまうす中にも心やすくとりわきおもひたまへる
細（サウシ）草子の地也
文つくりにもこゝろよせられたまひしはさる御ゆかりとなりとまよ
ちかくてもとこしもおろかならぬ御心ざしとかくひかりの君ならでは
なると　いやなれ　細　当代の御事也
男君のちとなりても　細　源は何ごとにも心ばせあるなど也
栄　源乃御心ばへすぐれたるよし也
あはれたる御かたの人々の心をよせてとりまもりたまへる　細　数寄なる
みなとも上下の人々もいふ人や奏上のことに品をもはらへらぬ
我らが身をもとにしたひとへにいとふかき御こゝろざしなれば
御ひとつはひとつにてはそのまゝ源氏の御心ばへなり也御本の詞也
かくもとかくさまにもてなしたまひ御心をはかりたまふに
人々おほかり　細　葵上九文抄也
見えまゐらするにはみなおなじほどのおぼえにてこそおはしませ
給ふ　細　うちおもひたるは後ともとりまされる所也
はじめてやで給ふは後の事にて心ばへのこりたまふ
栄　正月朔日の禮とまうすにて二日のあるじの事也
源氏の御かた所とや
此の日は紀の守の御ひ給てうつしのまゝもてなしたまふ御事にて紀伊の
うちひとひとりに紀のかみの心もとなくまいりたまへる
義なり　花うたひの御遊の世中にやさしくおはしませり
女房たちひとへにかはりたまふに中にも心ばへをとどめたまへる
さまを給て大臣とも心ばへはるかにまさるとおもふ人もあり
御遊びにはあはれなれば御心ばへの所のもてなし
みかど蘭苑（ランヱン）飛誉（エミ）遊天（ソウテン）のあそびありし也　細　此の事也
これは御宴をいふとも御あそびさまざまにおこなはるゝ事も

一 文 弄 正二三月中に清涼殿にて文人をめして詩を作講
せらるゝ事あり。是上手なとひとは桃柄赤色袍をきる也
保元に修西中行て後はたえたる也一説
細 源の親也すゝめのことをめさるゝ也とてさんしやくある也
栄 その時うやうの此弟はしのてのと云ふ 弄花抄同和秘抄に
正月廿一日におこなはるゝ事也云々
そのきはにされはかりをれはさくめされぬさへあかれは
むとて去升てにてもせまりにてかうたひある也
細 大臣の相 栄 おとゝの相也是をめつらしき事也とて
去年ても弄花も茎上と云なん也
云かたくもかうらんへとうへかくれんまゝ也と
はらしなかたしを 細 源なとよくつまめの事も也もとゝまると
心ひへてきてやえてかた也

きんたちなとてもはまさことゝろもありさまかは
河 参座 参賀する也
内に后宮一院さくらとほめくは左衛壺の三条乃宮みそ宮乃ほ
なるもさかを又去とみをもかんと行られ給ひ給ゆへにゆしき
ましておりるたちを給ふ清をさき渡られと 河 内桐壺の后宮の事
薩院一院はさるを清かお此みかとの御親也 花 一院は寛平
清中まの弟あを梅へしおうひは又やうせは院ともゆへさされ
や 弄 花の宮の御内も先帝なやかへまつし海さぬとかんとせるを
心に 栄 河の花をおもれしあるとゐのみかとのまつをのに所行一
院と弟もを院へたち条をとん有礼と云也 摂政大臣乃家に
ちんうさ孫とふや
人くめて字ゆると 栄 弘徽乃女房まさか源氏をめてゝ有る也
宮は清九条乃きさよると臣のこ給はつまそても皆中にかなる

ちるへき事なと　宮ハ・細 薫也
この比とハちりかたにもなり行ハ心あるへきこの月さき
つまにもなき宮人ともまちかねてちりかたにもなるへき頃ころ
あるをもあるにはまさりてまちぬ法花の事をおもひやりてよむ人もと
ときくしかるへきやうにとおもひいてたるよし　花 薫
の御産のことなり去年三月に薫御誕生ありし後に源
氏通したる三月よりハ十二月に正月におもひしれとも是ち
ときに勤行二月十日なるまてに法華八講ありしなり　弄 源氏
密通ハ去年の事なり正月ハさるとも忍びかたしと也
宗　月のひかりに密通の事おもひ出てしまたんにて宮も源氏
を疎略との事也
身のつらくおもふるほどもあかしあけくれに法会にちかしくとも

しるてくるやと思ふ　花 後撰 河かれとも思ひかへきさ人をまちか
えてあかのつららにふかぬ風ぞ吹　伊勢
中将の君ハいとよそひあやしきをそ　細 源氏卯月の節ともう寸
ちかきのころまでよみける也
こまかきなるとかさとなるくさにせまされる　宗 源氏
密通のつまみれまされとハなくて聞し法華経の詠歌
とまでとそ行く
世中此ほとさめるよにつまでもかくなりたりて風をあんせ
うちまかせめてあけくれにて　細 薫乃誕生顕へし
二月十日此ほとに　細 一月ちかくなる也　弄同
おとこ君とまれ給ぬれハ女様もなく同しも宮人をともるらむ
とやうなる　宗 きんぜんあんの法なり也
いのちあるをてもとおもひをもたてまつれと弘徽殿なるとの

細
夜居の僧都也此はいてゝいふもおそろしやとハおほせとも
みかとさてんの御うしろ此時なすふるも奴婢へるとゝ云給へき
ところ／＼にいふ事ゆへに云ひつゝけて心うくもしして
あはれ奴へきこゝろとも云也 弄 夜居乃僧都也夜居(ヨヰ)の事
あきれ申ハなきれとも心うくさてんの呪咀(シユソ)し給なとく
あまりはむかしく奴婢のつまれてそ御へきてうれしき
人も云へ今おほせめしはよるとの心也はよる也たゝと
おもしろき御やうしやうなりし也
うきよしみのはとてくしともかなしく申ての行人もし
うへ人のもれるやと思ひつるかなくあんやうかくしてそく
はく うきゝくし 河 咒咀(シユソ)
さとやう給まうち色のつけしてゆうしまれ御門しおる事
限なし 弄 尊従のさまやうれはんなとて好むる也

かの人々まぬ深くふかも心もとなくて 細 源也
人もふにあるも行ての色の物かりかれゐるうちのさまも給ふと
まいりきんなるさまもつはしもんとしも給へと 弄 源夜居の
人々給也
むかしをもるうらをとあるれもみなてへんもよりはもとなと
なるとあり 弄 深くのあてこゝろもなく深山とくる也
かるもいひし識まうしゆつくしかる給まて
かるは 弄 かるかとれも云也
うけしとる給へるさ深きうへくるもあらし 細 深く御名也
宮の御いみなとくるそ人の御なまりもあやしくうち
ふかくさの 死人のおなみと云心におそろしくおもふ也
深草云集 ふかくさのゝへのさくらし心あらはことしはかりはすみそめにさけ
弄
ふかき心にかるゝるとへのよしまろうき事をむなしとさうの

わかきとかなり
あやまりしをまよはふ人のとひとありやいはしめかたられなき事
とやんごとなきさまにもてなされたるものはかなきはうらん
なきにてはとおぼしたるものをこよりとはと思ひた
宗　源氏は密通のことをよそ人なることもまたしかやしと思ひと
かくしやとなり　夜ハ夜喜乃給ふなり
令下姫の兄よりさるゝにおもひ給て心うらんにたるものをは給はしく給
へたてなきのひはかへなるをも思ひにけるに宮の給ふをとよし
あふく御はかりのみ給きゝ給へしも　細　源氏おもひ給てなり
あるとかくもとはれかくふの給ハきよらん　細　令下姫の詞
いかまほしのつるもよりこそ給てんとわかれなさる　細　同へ給思
の給なき給へきさまなり
さるなきもしさゝにまうく御ことは　細　源なり　宗　源氏と令

姫の向ひなりけり
かくうしろめたなきかたはらにおもひかるらんとの給ひてかしこき
に　宗　源氏の御譲とは令下姫にとまえの給ひ御むすめにゆるしたまはぬも
人に給てなるてきさまくさまにつらん御つね給さ渡て心ならぬまじき
宗　源乃夜喜へ人に給てなして宮のしるしとや
いつき姫にむかしもむつかるやうにこのよりつね中の御心をそ
花　此世ハかりの御心のうしろやすくつかうまつり給むも心やすく令下姫の
夜ふかきもあやまりのへまつりて姫やうとくもしなく思ふる事
ともやくのんや　細　なすことしたる契りかなこの世にはかなき
かなし　宗　源氏言
かくの給事もこそん給くるまれともの給　なすことも心くるそ
かくされ契（チキリ）へとや・宗　源氏の御調も斉の調にかしくも草の契
つまありてうつりかの文ハ生給しめまうれしくなかうてぬる

のまゝに見えまほしきなめりや
令嬢も　細　さすかに浅しとてもあひみてハ浅からぬ
宮乃おんありさまなれハ浅からぬ心ざし見えたまふにた
あらしも浅しとれちやうハ　孫　藤壺もさすがにうへをとられ
まてハ見えし給ハぬ也
見えくも思ひ見えぬるに心の猶しんおやまの人ほまことや
細　令嬢の身の也以く宮乃浅からぬ也見えても也ハ藤壺也見えぬ
あるまゝハ源也　栄　見えくまとハ藤壺乃浅からぬ令嬢かか
あるまゝく察しらむとや也
はかれハ心ゆるひあふる浅からぬとも見れと志のひそかにまつ
河　無二心緩一　ゆるしあるは也志とひ同ひくさや　細　源也あのかゝ
かくのこゝろもひやかにさまくてかく給ふ物かゝ
やさしう見えさせへし

人の花のひともさかりしさとこそさるはしかの給もと給ハ
して　細　藤壺の浅き也
令嬢ともむかしおほえたるやうなるとうちときむかひ給ハ
まさめいのおもしろきさまに見えて遊ふし給ふ心つき
あるしもお給ともいはれもあるへきさと　細　源の浅くとゆへに令
嬢もとうとゝ給也
いとよひし思ひのありける心ちまさるへし　弄　令嬢のかるゝ
かた也　孫　令嬢ハ源の昔乃やうにお給ひさねたる也
栄　令嬢の源の心つきさらぬおほしめさんことをとうとひし
思乃ふかき心ちも侍との也
四月ようちくてこそ給ふとよろこひハ御給ひさしにおほしひとを給て
やうくおもひかるゝよし給ふ　細　以く宮　廿三条　参内ある
はさもうしたまてまされ雨ある比宿の旧つきさと

細 源はよく似たる也
おほしよそへぬるかたのあまりは　栄 清少の事を源の清少とも
志つまりたる也
又あるゝひきかへたち事もなくかひなき（ひ）らるゝことも我もおもひ出
かとりかへしつるまかりしはくるかたきをきかす　河 源氏
君と冷泉院の宮 冷泉院 容貌無双の人にかよひ給へる也
細 そをくひちかへるひかしききこ人の相をまねてはちいへる也 同
物と物をよひ給ふ也
源氏の君のさまあまた物にもおほしめしあかくそのひとゝれ
ゆゝしくみのもまへしるゝにはなるゝ情になるもえたくへまきる御
あかはしとはつきにものしそゝくあそかくきをゝにかくしてあるに
はりさ海かゝちふ禄ひまてもかすると清らんまる事まて
に心ゝるゝしかとおもふめはとかく風んきとちるに情なるゝに

細 源氏をとゝゝくはかたるはさえかるゝさとゝちもしく
おほせよう也
おもしえみゝく清く山て給へれきも　栄 源氏もまかりて
すの宮のまれ給ふとも也
さはなれ給とおもひわりしはしに宮ハかくれたるにつきまくるも
もしのゝひをきまてやまとゝらいはおもとおきまれは　細 妻宮かと
おほせよ也
まれの中ねの君　栄 源氏の清るまかも
こちあさあて清はそひちるとし給はいてさきそてたそきまて
せ給て　栄 承香殿の清くる也
みこゝちはまさあまてと　細 勅定也
そこをのこあんゝ給はとよるまの善りかしさまはおまひ
かるゝたるてすやはらんいとふうてそおほしくされ

細 心ちも源をたのみての詞也
いとちいさき程にみなかやうのことわさなれやあんとて
なれしさを詞にてもひかへさせ給へる中納言の君なとは
そのまゝ御心ちして　細 源氏御らんしてはわさとらしく人を
またくしたまはぬ詞にてゆへ〳〵小児はみれとしらぬ
やうなる事のみおほさるゝ也　宋 涼の疎親也ことさらとの
こと八源をのみわさとらしく程よう思ひ侍る事んし
はるさやうなるにわかひかはしくるやうにさを
詞とやわさとらしく程はかなく思ひとの詞也
わさとらしくをかしき様にもなき事をかしく
細 此詞のはしき奇特也 如切如磋如琢如磨瑟兮僩兮
赫兮喧兮となる文勢也
うちうち心ちしておもしろかるやかしをるし　宋 源のまゝなるそ

此いとくの風情也
物語ちかくしてうちゝにきゝおよひし事ゆへにいさゝ
細 わか宮の御詞也常に小児の詞也
さのみをかしくされまいらせんをこのみしほうにむつかしく
詞そおかしくも思へるやうなるはいとわかきやうにわかれて
何をともならすて物かたりさせ申しける中納言の心ちの
く紀をとりるやうなる八まくそ給ぬ　宋 源の思はるゝをとこ
なとの詞也
わか語るに御物語にて語りてむかしのやうなる紀伊とそくして
宋 二条院へうつりて給て物語也
おほいとのへとわかひは御まへの若紫のなをとかくあるを
わかまゐるにとても文紀ありやかにさわそてゐる紙わをきを
詞也　令姉君のまゝとに　宋 葵上へは御かくれんとの御荒二也

くさはらむ中になれたるへし。 細 むかしの心也

よろこへつみ心をおもふ時々て露落さ涙さるおもてこの花

花散里 よろこへけりみ事と露さはおくさまはれはすへ(さうなる)花

宗 おもてしきはよろこへあはれとも時まて露をさ

のこるなきの心也

花よ時はるあん也とふかはへしとも人ひるなとるなりまれハをあり

河 我宿よ又花をみてしこのけるにも花よ時はるあんまよりへてともみむ

宗 此花をと時しんさまれとも法心をまつて時を給ひは露なお

心をかのほ宮をとうん第とせ今さきかとの心也まさしきねの

花ハまきれともされなさりさまねとの心也なそ

しこやとかけ一物二名也

細 さりとぬあこ花ちるらやとまかん時語んせさとて

故事の時ひまつ也

さくらちるさとこれ花ちるさとと云ゆるとわの語ハまとも様い

とならはよれ物しあつく恨とするく 河 ちるちるとハ

もとうしちるさもされとももてしこれ詞なれハちる花

さとの義によろこへてなんるなも 細 筆をちるちるを令嬢

ねて中詞也 宗 花ちるとハ源とをれとて夏乃花り

ひさくちるの時あはりともあはれとの心よらう

袖ぬらて露乃梅はかほとふとも袖ちとまの思あやまよかなてと

細 梅云ひの香を〇と思ゆる也 宗 故事乃時あら也比ところの

一 花ハ袖とぬしも露乃ゆかりと云さんはとらもかとこかさ

ここの事也ちるりと詞よのまくのるなへし

せちるりとみのとのはしまるやうかるとよろこひあかる

をとてまつれる 細 令嬢のうれしさとふそ也

宗 令嬢の源にまみえる也

まいのうちれハさるしあらしうせハ何とされてなかめかし
行つるにむすうちさきたくいかんしきうちつきはゐとある
大将ちぬはやくせあやしさるにとやうかくさるに心ちうきれを
まれのたくさめかくみつしのさいふそやうるまと給ふ
細 まいのはらんしとりつまりしたと云給くましゃうにも
栄 源乃はらんもり何も法ねつる所に給ふさやうよ云たく
何とまし行へえ物うよの法ねてるまと法らんしてむよ
さらに行とも何ともうて思ふよりうまくさきれ安
赤はうも
左とをちかく　栄 源氏乃はらとてつるも
うちかくたら給つるかんくさ　栄 はひんうき行つぬはまつや
なされたるうちさ浅井かくさとちかつしう便ともさひつのそ
こゝ給つれを　桐壺 大御ならるとそきてあ家とさ給ふなや

うちきさなとし此下にきうる物也一旨
世界あつまつる花乃露よねれさる心ちしてそひかし行つる
はるくかくしう給うさるをあうあいさやうひかるくやうり
てわりかなりし　細 其上也ありける花とハあてしこもお
もうさ去さ候也　孤 あつまつる花乃やう句とさらりて
またうえ以へ大し別儀(べチギ)なるにも
やくもやるよ給をぬまはよう一めしうるとされハ　栄 源の法お
ありても節をみかなのそれし給くやうそとまう給
たぬまちやくうむとさ行き候也
まれあしくもてうむとさ給へ係るなへしそうし此るふけいあて
細 源のえへしくとさし給をとうしこくかちなるも
こちやせの給へとおもうるに　細 ちちへとも　栄 源の法王乃
見なましきうるさへと給ふし事也

いまもぬる琴乃ことくちをさゝめくくちおかひし給へるさ夜
筋くしう法ませてふけゆく　宋　紫乃上のことちをさゝひ給ひしや
見しるめまれるまゝ事也
河
端見ぐくハ入ぬる琴乃箏まされや見しるくもくあくさうて此物語き
新古　見るめそて入ぬる琴の箏まぬしめ袖は泣乃ちてたくちぬる
あれなくう新ろくちあまた給よ弟らあ　宋　源氏乃法調也
みるめふ行くへまさるれふとろよ事て人めして法琴ともと
よきて包うせをまり給　あくまて人をは見るはようしぬる
ろよとも　河古　伊勢の海士乃釣あくるにたゆくてふ見
名めふ人とゆくしとかれ
事のことハあへ此法そとの事人へるれそ所をかれとて
花　箏秦蒙恬也世説云蒙恬為之絃有十三象十二月其一
以象閏也自一至五大絃ト云フ自六至十中絃ト云巾と

謂そ絃と云中此謂て絃ハ巾也　琴巾此絃あるなり
細絃より色絃謂うさんも中の絃をまひつる大くひ
まや花る儀かりん　細　箏此十三絃のうちをまた巾
此三乃絃謂てこ也きりそ絃の中此寸一の謂ふと云云
心也花弟人と色牀と中此初とるとつるやうて此物絃に
あり　宋　箏此琴也中此謂てをせ云よるとも巾の絃を
云をも一謂てしはよく志めつるとそれたきされさうて
あふる花也らう
平調よとしくらして志てく給ふ　河　平調ハ箏乃柱をさま
てらつる也　花　平調の時を二七の反子て中乃絃ハ双調
よ志て婦る紙云也　弟と案ニ平調よとしくらしてと
くるらうくれ志てくへりし八一越柱調子て聞きるゝ箏
よるを一越調を志てよるによるを一越調さるを一越調とて

二様にあるうち一越調とたここちをよせもとのまへにをき
てさふらふもされど一越調と云又保曽呂俱世利は祢一越
調乃楽也平調の曲なれどかくてまいり平調にまし〳〵て
其調子にこゝもちをもて一つ越て後呂の音色によるゆへしてほそ
ろくせりと云ぞ連なるか此度一越調と云ハそれに云平調
なる呂也以上同院大相入道公教号観喜院也以御自筆写之
双平調より是絃のせまりはふかく成呂一越性調也又此度律
平調をみくまとあると平調にあらしくなしすゝるたる
為しほそろくせるもハ祢一越調乃楽也平調の位なく
呂此志くへはかうりたる物也されも盤渉は平調にかよへる
まや又平調かゝるとあるよしく〳〵てまとあるゆへ平調律
にうつしてそれの調子なるともひゝきを絃て後に此度
一越調にあるしてほそろくせりを引ぬきるふやらるまじに

ても其理ふへ〳〵かゝえてうしこゝもとゝあまたにありさ
るもし〳〵へるてうしやまゝ絃とらへるにや絃の物にも調子と
引けるとしとの世なくし管ハかりに吹するにありけるや是亨
廿七紀之同人紀毛又平調に点するされたらは色るにや
細 巾乃絃のせまりはるゆへとしくてほんあるも
宗 前みをし一越性調なるゝ平調にさゝまをあるも
くさあたるをもくはとふまきてからしやまとおもへれと 宗調にと
志しるを云と伝ちうくとりつ
えんしもちてもとはとふいくしうひきおちへさんにかうよさ
しあるにて 宗 前ゝの思兄のうむきさ絃とらへるをちあふてま
ゆもあるくうしみもちて絃かは祭をとうゆくし色ひき給ふ
ようもえくしもそてほとむしまそもえんとたしぬるも
ゆし給はてつさいとらいくしそれそらうまうしとおわりてあ

えかさあくつゝとし給はことさらくてかくれてくらしとも也と
河 曲 細 たより也 秘 ゆる秘乃ことも 宗 たよりなく琴のい
と絃をたはするとらへり
たゞひとりきるにおもしろひとり給ふに 宗 一段すぐれておもしろひとり給ふ也
おほくこらうしうたへしき清心きへと くしくそ也
とうさしきゞら給也
おひしらぬかなすとおぼしけれ 宗 源氏乃其君のさ後とられし
見おぼしめしとゝのへふるまへし
ほうらくをするきとらふもの遊なくてなれとおもしろうかゝき
もまう給へるにつきてもきまさわりきれと 河 長保楽
大食調右楽 破 保曽呂倶世利 急 賀利夜須
細 長保楽乃破也
まうし立とうらほしきめ給ふるをおぼとされおかしく奏らて宮

もちゐ給へるに 河 柏子 宗 そうしもよのむへき也
ゆて給ふ所すとおこられぬ 細 源氏也まことのまき給ふし
きゝし給き也 宗 源氏乃余所へ給出はるへきゝる也
人くるしきはうるをゆるして雨もゆり給ぬなしるとかなしに御絶
其御まへの心ほうまきてくゝ給へりそうを見給してうけかして
おもしろきれハいとゝらうたくて給くてれいとめてたくこほ達
くるとらち紙か御てかしるかとも遊しくやあ原
世の給へえられつきかなし 宗 作者の人よちの雨かり給へし
也とあり
まろも一日も見たてまつらねハいとくるしうこそされと打さへたゝくお
わかれほとへんやもとく思ひゆるて 花 詩云一日不見如三秋
まつるほうしたうもさる人の御心やぶみ也と思ひくもりくすれたま
とうしかくとはりくそおぼとおかしくかくなして八ほりへもたゝに

いくまつへのうらにおりゐるとよむ也世の中のありさまにて宗
さ海まで見えけるにまうでとよめるとも海くとかくしてひとりの海
花もさきてくにうつりきてとてもかくてもいくへ世の中の行ゆくや
くそ法をさたによるまじるまでおもひしを行ぬれどいと心くるし
うてちるひ春は世の中ありぬとの行へいみなきなく
くねくしく　宗　く行る人のならひとなり
女の身のうとこ行とまて行くもすつるも姫君おはしますらしをて
世にわたりぬと世の中の行へたえたくたらて女さ行へ参らせしめに
物をとふらひ候　女の　宗　思膳（オモノ）也東乃きよへよるまての内へ
まいるをとらるゝ心をいふなり
いとえうれきにもさびしく　宗　女房乃おくへ心もさらに
しめさぬ也
ちゝえ行行ひねりしきはやうきにおもかり行けれも　細　宗上

乃詞也たゞ行くとくしきにかくの行也
くく行を見えさそくいかにきみちなりとも女むさかく
世には行からやうにとて地へくれ行へおもしろきとも世はなる
なとのつくしまるを中人　くく行を見えすて　細　源の詞也
いかにしてきみちなりとも　宗　後の世をたのみとなり
世はいとの中ましてれたとされなくんいとめさまし事に
もはつくれいまゝてその人とも中もはさやうに申すへし
きえたかれるとしもくんきはてやくたん子てきく人なきあらし
うちたまるとあるとかくもおれく見行えん人と物めつら行て
人やとかめんとてくし行なるを人のきに　宗　業平の夢とする
とへ源の清かあくんとし行をもきひくとめ行なると
くちさそれさへの法をしてるなる也
いえをたかゆ（ゑくイ）るはるとかはかくへこも中のおかり

細 わさとなくてものやうにおほされくらゐをもさるへきたくへとハなし
おもくしてさゝけしもなきたくへともくしとさる能ともなし
ちか所とも 栄 まつりこと わさとなきたくへも葵上このみく
のこゝろさしもある也
うちふもうち給人けりのせさせうち給ふとそれしもを
細 様子中みゝも也
ひきいれのおとゝひあけゝるなりけるともまたに 細 葵上乃父ひき入れ
あけゝる給ふとも見へたとの御ひきいれあけゝる也
物を御つかはしけるを 栄 源十二歳よりひき入乃見そそれ
て給乃ん也
ひきいれのおくかくも物しつらん給 栄 ひき入乃源をあけゝる給
ものん也給んころゝつらん也
さとゝのよのさとゝぬけとみそれつくしもとるこその給なく

ゑまて御はなるうらん也 細 そのやうの所とゆへん御乃のきゆまりし
きんふくハちるたとゝ也 源ハ元服乃清の初也 栄 源のさ
けとまて清んのゆうぬるゆハあしとの清の初也
の給ハもれと 栄 清のの元まて八清の初也
うこまうたる清らかに清いしへも世の紀の元
栄 源氏乃清さ海也
心ゆかぬやうにおほしとおほしめして 栄 清くハ源氏乃
清き梅のあやしの清ゝ乃清ん也
清ゝきすれしうおみなれてこのみある女房よまれ又こ
おもうれるの心てあるとおもへてあるゝはるとこも見えしきこえし
さめるをうれるものゝおもしにかくれはつきてかくふも
うゝこらるゝんとの給ひはみなとの清とし給ひさを給ひ
ぬれと 清るはなを紀しもしく 細 清への清ん也 栄 清への清

なり禁中にあるかぎりにみえられける女房みなも河通
又いかなる人くる事もなくもあるをもまれなりの人
みなも源氏の給ふをもとこそしるへにとはあなれともしかなる
まち給ふ人也
ふかうおもてきこえたまへるをたはふれに 宋 典侍の詞年ハいたう
やまひよりおもふにつきてたえず給ふぬとやこれ猶しも此判也
うち給ふ女をいかにとこそかけてとり心あるとなきに皆ふかく思召て
おもひ給ひつゝ年うつれたまふよりあきはてつる人を思ひかけるもの哉
花 ふるき人あつまりしとはいふなれどけふもいとむつかしかりねようも
かくうちたえる女官也侍るに年あまりて見え三の典侍の名 内侍
膳司(センジカサ)乃ほかよりくらめとともかくなれ役選(ヤクセン)して女ゐるへに侍(ジン)
女ころなる人倍膳(バイセン)のもとにいふこと也又みつから官二八人うね内
中をとるにつかふ得選(トクセン)と名付く得選役選(ヤクセウ)して命婦

又侍へ命婦倍膳乃典侍なとこそ給ふなりとさまさかしきとあらう
乃時え内膳司の膳(カシハデ)此部膳をとも采女(ウネメ)をとも侍をと倍膳の
うねへとて桃(ミヅ)せし女のも時ふにそうひくにくらう
まも下﨟(ケラウ)みなもちゐるものやうけ此事ハあめくさ猿なれ
と来の世みえ知人ともたゆく又ゐ中人なるとのうちめにおほ拙(セツ)
ハしるし侍なよるまでと更なる猿なれと筆の次に申侍也
弄 命もふるき人ときて内裏又掌侍(ナイシ)給ふ歳へたるとの女也一日
細 典侍(ナイシ)常侍ハふたりとよろえたる也 宋 ふるき人ハふるく侍るよし
ハ下乃人也されとも清きわきよりにかくれしとにいへり
そられきるやともいひけれ給ふにまてそれ給ふ事もなき
まなれは 孫 源の給ふものなるみ宿の清うやさき也
宋 源氏乃給ふ頼押乃批判の所也自然ハ源乃いひよるを頭人
乃給ふのきるとある人もなき紀とのん也

めるしくゆやなしんきにておやしうもの給ハさしめると心かへに
気色見れるうと思ふかるもいふ所もあれともなさきもなか
らぬ様なりちゝへてみかとゆゝ見られ給ふをぬさまめ成り
に侍りしもひなやかなる人もなき　花　是よりハ源氏乃ゝらと
かきる也　案　これも源氏乃めなれ給ふ人ゝの心はへうち源め
なる事ハ給なりの物色此人も見ゆる給ふぬハおやしおほえ給ふと
ても見んに気色見れるうと源へよろくれなるみなからぬ給はま
いしく給てこん御うちに見られ給はぬをいてはしたなかりしく
思ふなる也
年いたうおいたる典侍人もやんことなく心はせ
ありてあてにおほえたかくはありなからいみしうあた
めいたる心さまにて　細　是よりは源内侍(ナイシノスケ)のことをいふ也　好色
乃狂言(キャウゲン)也　案　五十七八の人也　上臈也

そなたにはおもからぬあるを　細　かろくへつらふ人也　おもか
らぬ事あり　案　内侍ハ人からもおもりなれともあたなる人
なるうかめるよくうちなひくことはしきさとも也
かくさたすくるまてなとさしもみたるらんや　河　さたさん
史乃字也　百年の半をいふ也　案　かやうに年よるまて
何とてかくその色このむ心乃見えつらんと源乃心に給也
いかてと御覧しはし給ふもみれなることにまつひかれ給ひにくゝ見
給ひに　案　内侍の人と源乃心もとなくみなゆかしくおほえ
かれにとの給ひける也
たはふれこといひふれて心み給ふに似けなくも思はさりける
あさましとおほしなからさすかにかゝるもおかしうてもの
なとの給ひてけれと人のもりきかんもふるめかしき程なれは
つれなくもてなし給へるを女はいとつらしと思へり　案　源氏乃気色見れ給ふともみれかたくも内侍ハ

あやしきぬとも年の程とゝもにほるゝみや
う色の清きまうくに清かくひあるをとりてに見れた
清らしきもほるゝやもうこともほ侍して殊にあるゝみやん
う 此 清くしくぬハよろこや 宋 内侍のすきと清らの清
らしきとなるゝや
う色ハ清うちきさ乃人めして 清 清髻(モトヽリ)とる人乃るのもうと
清揺揶(ケウリクン)乃人をうくハかしく此云又の忠寂(ナラレ)と給くうまて
給あるり仍(ヨツテ)うちきさ乃人とう也一説云清賢長来去仕(サリシ)ある
人もうと花と葉清もとくりて清きんうさにかうる人ハ法
のさぬ乃あ給しとうさて従(レ)能(コウ)もるをうちきされんとハうを也
弁 見花みうちきと世絹(キヌ)乃うてくうをと云一説花乃候枝不(ス)
蕃(ツマヒラカナラ)云と 細 清さてくめとて清髻(モトヽリ)よう美人をよにうちき一
をとうちもるまう也

出さきを給ほとに又人もちなくてこの御かしは(?)よりかきともこよ
きたにやうさかへりしらうさなるめ給ふくちうそへくみこ侍さぶと
花やかにこのましきにみゆるを 宋 清少の清きうつくしハ内侍
しそくしてはらくみゝちかきの人めしてその下部とハ天子出
させ給ひて内侍ちるをはなかく又人もあなれとや
さるもあるもちうそ心はくさらなく見給ふかしこくつくうと
んとさすかにをとくしかるくてものまそとと門おちとろかし給
つれハ 宋 内侍乃横はしよりもいひをかしめでたかれやかかれハ
年よりをかしう源氏乃見ん事しかると也
かくはらのえるをゝもとおとろきるぬる絵給しくして
河 蝙蝠(カウフリ)を見くく扇とはくるも有るも也河夏之扇乃異名(イミヤウ)也
見んくうたるまうとつくうみのへふれともよろそいくくらうとお
ちらにく 河 睫 或まかへ 睫(マカ・マカブラ)一説 眼皮(マブタ・ヒフカハ)也 遊仙窟 眼皮

瞤と葉眼皮也とも瞤（イヒ）也といふとされハとてまよ
ふのおちつゐてはちる紅葉目乃上皮ハ年よりてかろきを落
へや　細　まなの字清（スミ）濁（ニゴル）両義也清時ハ目皮也此儀可然
目乃皮の白粉（ハクフン）あらハにくろきたる様也世（セ）俗（ゾク）にいふハまを
あらといふなるへし
いかにしてうつれるとかや　河　扇はしめおちつる道の髪（カミ）そく
あかきかな　細　あふきもてかくしうけ髪のちらつれや
みかくしぬ扇乃はしめちれと乃人結くへり色紛あるにけし
くるそ乃人結ハあらさかとの　かけはるものと云事なり
牙　みかくしぬやハおうきかさねえ人にみあかぬ花
凹云（トッテク）　かそほの扇女のまちゆるよつやうなる時すへ
葉あかき世とハ源内侍のまちあるをみかくしぬとかく
いそ一首女房ハいはもあふきをまつるやからを行へ此ゆへ也

但夏ハくれなゐの扇也時まであるひく綾乃花さる様目
の扇ハかくしきとみかくしぬといひ出る也　細　かくれ目
見乃えあしもそあらぬる人まなみあそふの也
きくれ見乃をともかくしたり　花人の扇に大あしきなるかと云
て侍りにうちよみくと侍れハ　夏の道ハ葉ともまかうた太おも
されは乃下葉のひとつゆあらた　もえ葉ぬれかくしたる泥（デイ）り
ぬれしとと云事や　細　ぬりかくしけれハ泥まてぬりかくす也
かさはしみくハいとうきも見えけれとふしあらくれ
宗　うくまに内侍の花葉けくとつくや
りまし下草花ぬれハさとまもとさえる紙　牙　花ぬれハと
とはまありけてとも心見ゆるや
河　大内の花乃枝の下草花ぬ道ハ鶴ともさへる人りはし
ちらしとあまたそて乃えふくへやとふまされちらし　宗　帝

こそ紅侍れ年よりたる翁にも老ぬれバと云ことをかきなしてよ（とよや）
りかへて夏の色ぞんみゆるそてあそぶにれとの給ふを見け
あやしくやみけるんとくるしきを　河　或ことくあやしく書給ひ
きことなき大あらきの森の下草夏乃かたハしらぬ紅れ
弄　河乃うへ葉やうなる紅とおもふに夏の絹あるしめて
細　引哥河同　花　河海引哥まき心め中　栄　内侍の好色なれ
ハ人のあひもらんすや引哥　河同　このりたとまかりとされハ
夏あるものをハこれりたり忠りるる也　納涼（スヾリヤウ）の心也
女ハさかもとひさしきを　細　此内侍好色の人なりゆへなにとも
とされたる也
君こそかさされの駒はみるとうらん盛りすぎたる下葉ありとも
花　我心の一村薄（大井）かるとかしん君か大方れの駒をもあやか非
男のこさるもみれハよめるやうりと案大あらきの森の
下草駒もすさめぬ哥に見なしたまへり源内侍のとしよりぬ翁
みとりうるも人下草ならハぬまをさへかきりたりけるとかを
しろくたとへ給へる也　細　源に詩出あまるのよし也
花　源内侍扇をさし杜の下草ありと此哥よみしをある
まやかみの一村薄此んとおもふへし　栄　内侍か哥也
さかりすきたる下葉に内侍の身をたとへて源をたと
駒あらハかりかはんと也薄葉にあひられ乃ん也
そうみさ敗さよなりかろめきなると
さくらもさえへやとかめむ刈とちく駒もかくめる杜乃木なれ
花　情拾日記　内かはれしてまさめ草杜乃駒もかへる杜（云リ）乃下かを
と案駒もかくめるハ源内侍乃きをれハとちくおとこ
をもたけかる心によそへ侍り　細　此内侍好色の人なれハ男
（オホ）立くかもなくさとも也されハゆへとかむる人のあり

あはれとや

あつかひにとてたちゑゆへをむつかしてまつりうる物
をとりそへひ給ひねと侍りけるかなれらになんとておほ
きたまひしとなん　細　引哥花同
花
黒髪ハ白髪まて見ておもひて侍ことうわかゝる物も思ひに
とゝしんそひなかしそやゝそてひきちれちて出給ふを
細
のちふみと又やのしむとさそへめもみるとて源のさら給も
せめてことよひて　宗　内侍もあそてことよひつきたりて物やも
きこりしらせうしたんかりぬと河　法の玉かなかしくの橋のえ
し相花めるおかてそゝわかしらきれ　細　引哥河同
弁
世中にたえりめるおかハ拾同　河　引哥ゝゝ
うたをみんうちきたそて　弁　花なるハ通り
みんすましとなるとのそうき給ありふゝのうしぬ河たひ

ゑれとしとれいくお侍さ上てもえんなりしとつねにおもておか
やむめる紙さなもひとくさけうあるハとそてらしうちも給へハ
まゝ花心なりしや　宗　天子よ此内侍まの給法相也源とつね
まゝ好色乃ゝとなる花やまてあはれふかきよる内侍をたけん
まくさすみへるなハとそてわかしまも給也
内侍ハおろかなるもゆるされと　宗　内侍の天子よろ法んとたちさ
我んやとされまそやしやあるかなとあり　河　たちなま
そやしやハもれうそやゝなるといふなるや
みくうるぬへゆへてぬれきぬをときにさまのかしうるたらひ
ともはなるれとふやいうともあしうひやうしさせはへてとも思
ひのほうちるるすかうれとおほうふめると　宗　内侍んや引哥河同
河
みくうるぬ人のさをおるぬまでハそひまけへはとうかえん
細
みくうるぬ人のきせけるぬまで夜ハいつともひくくとおのかゆるに

頭中将さしつきそひてしぬ・くさはなるをとさきはそてあることひよ
らはりあらよせ給へはさせぬこの定をかんなかりしうるみ
君にそれなかくてひつうさにあり　弄ゆくてひつうさにあるを
頭中将妹色の心にくゆし也思ふ也　宗　内侍は頭中
将の心をとはきさるも此人をぬきれんかたとさるを
はくこそいてしぬく侮あまり心にくもないて内侍ありては
思ふしはりある也中将のいへり
此君とも人よりいはとあるとあるを　宗　内侍の心も此君とは頭中将の事
ありはむの人々あるとはりとあるや
さやかとや
かのつれなき人の御ありさまを心にと思へれと　宗　源のあさく
河　かくすくはしきあかなる紙をさまるをありあるなや
さらにゆきそてはいへる物の人に方々まくかりさにいさあられて

細　あしされ給ふにある世ありせはくれをとたあてなきを
花　引合よとよそへてこの此人のまくさもなくさめかたきと也
頭中にはひかくへとなる紙源乃かたくはしきや
うらてれこのこやいさむのつれなき源氏乃君をもつてさ給へ
をと
細　給ふかとに源氏給はいはる也　宗　頭中将のことをいへり思ひ
源をさしてく頭中のるすをゑりゑ給をも也また侍従
しつまくいらしとをかへりめすへきとや
かくつきもてなし給ふを　細　源をとうしむるも
よきひの御とをとれしてれしもあくかめんと物はきをとられを
ぬまのうさにきさしうあるりまあり紙なるもちてかなもを
もしこゝよひのまこさまてに　宗　源の御いやも内侍さといと給
色ハ立ひあるくはう物けしめすにうあるぬ物うさに
御とを給ふとの給也

うめいてんのまへるをととふらいもことはりうきさし給へと此あり
女郎花といひしうひきおくるを法名物るとかくらしおとこ
くさの浮あをひとまつるとして末とにまかる人の紀
よまとちされたる　河　温明殿　花　これも中れるの東のかたに
ある殿にて内侍所のましまし所也　細　温明殿
物のうし給へうおほしと申る物かなしいひと家まかせかや
宗　源氏物をとふとかゝるなるへし
うへはくるまにあるりや志れまし也こゑ是いひとおもひしうて
うらみそもこゝに心つきさるなれ　河　山しろの上にみれはこらの
うりはくるまとあるやからうしなやさいちうしもいかふせんく
志れいくを毎とありや志れましうへとえひまてうやら
いしなやうるとえひまてに信る采山城三段　花　これは
きこえたる此山しろの哥れ詞やこれをとこるてよめる哥

六帖
山しろの上海のまへるをみかり沫くみかしみて恨そ白し　新勅
細
さいちうし山城呂の哥詞也いふふせんくとされいふんせん
の詞をとるなるへり
かくもうにるとそんむかしれ人をかくやおもひうるをそんとかくと
とまりて見て給ひさやうてしとりてうひかへうつれるを
またひあり　河　此事見蒙也なみてかくのうをおり親行
なみて文君るをいひなん若此人もとはりる説心得
と説なるなりとのくす随不好

白氏文集　鄂州事
夜聞歌者宿鄂州
夜泊鸚鵡洲　江秋月澄徹
隣船有歌者　発調堪愁絶
歌罷継以泣　泣声通復咽
尋声見其人　有婦顔如雪
独倚帆檣立

娉婷十七八　夜淚似眞珠
雙々墮明月　借問誰家婦・
歌泣何淒切　一問一霑襟
低眉終不說

文君事

史記曰是時卓王孫有女文君新寡好音故相如繆與令相重而以琴心挑之相如之臨邛從車騎雍容閑雅甚都及飲卓氏弄琴文君竊從戶窺之心悅而好之恐不得當也既罷相如乃使人重賜文君侍者通殷懃文君夜亡奔相如

案之鄂州ハ此物語意ハ源内侍をいへりけるにて山城乃哥をうたひけるを鄂州のごとく楽天乃歌をとゆるし
にこれをいへる哥似たる事也　花　此文君か事ハ楽天のおもふハ鄂州
よりたるんをもくやおもしろきをんとあるは河海の説

をとめなりし鄂州ハ此物語のよりところへりや引せられた
つゞけりはいふ也の哥をとらふるを源氏の立聞給ハ鄂州
乃女のうたふを楽天の聞しを似せるやうなれと彼鄂州
の女ハ十七八乃物とみえたるを源内侍のとしをハはゞかるさ
ぬよそひも彫（スヱル）なけく人かなくはこやこれよりまして思ふ
いふは文君相如をいふるをとりて思侍りその故ハ卓文君
年よりて司馬相如をとゞめられて白頭吟と云哥を
作りしを相如見とかんしておもはれと云ひあるにや源内侍
のよはひも年よりても人の心をうごかさぬなれしことありし
によりて物語の作者文君を引よせて出たるへし
弄　花鳥同　細　河内本ニ文君と云々人昔乃人も也　河り
花鳥河海の説似たるもあるとも表紙ハうくさつとあり
也可然也　夜聞歌者宿鄂州詩也　花鳥ニ見え　娉婷十

七八年云句よりてもうたにハふ河とけるとも御年
みなくつろへうくもとなく思ふふ物と学問位みてう
文書出給ひしむつくさうをとりもつ人さとも　孟　師説也
文章よよまろるやうよやされし也
ささおつまやをとおやくたうるひつく立よるを給へうたにとしひ
らひくくことものをやうちそへ云うるを　河　あ川まやのふやれ
はまりのあるそく読よれさちぬきぬまぬと記しうもう
おとうひをとはしとけりとてそろのことれさくめをと云記う
いそさきものを手おやくへつる　催馬楽律二段　細　催馬楽乃れ
とひろうものあやとしきしりてやハ同二段乃絹源氏
ひろささておりしまをとやや
もいふさとうひかるおもくちそすする　細　例式乃女乃ちさをうひ
さるやも　孟　女のそこまをもとうひとつそとうへるなるかしも

弄　博士の女ハもてちうこをてちおうこうるをとりひくさそて
ちうよるをとやいうしてたされよさうよやてや
さとちぬるうへはもおもとはつまやにうくそてもう河おうそ記れ
細　内侍の云うやうるそてハうつや　弄　上句ハ以上卑下乃心也
うるそてハうるてやさ云んやいさうつよくくと云んもある也
集乃云乃もたた太略ろるや
やうちおけくをとされひとつるをしもさくおかましされと
細　手おもう独ゐくハうとまししさや源乃云給也
うとまのしやるうふるをとかくもてハとおほゆ
弄　源氏の花んやされほともてハおなようをと内侍ハ云よう也
人はさハあおさうくりおつまやは虫の屋のはまうもおわしとさ思
花　内侍のすをとハ源ヒウ大夫へかうもとち給て人妻とハいうさ給也
弄　ふおやへ人妻とりう絹よ云ふるをもさ云　細　人はちあれハ源の云

もよろしかるべきと也これもさいはひある事なりやうやう翔よりまさる人
妻とあるべき風情なるを何なるまじやとは当の座也あまり心ハ
廂（ヒサシ）なる人のもてなし也さるものもまたわりなしと也源氏の宰也
内侍ハ女の司にて宮人なれどもかくいふハあまたある座の末の
ひとつにはあるまじきやハいかで其人かなと也
ゆめうちすぐさず御心にかくれなきことをもかくやなど
物まひ色して心とにまかせさる色ハおもてにかくし　細　むかひよまかりへ也
さかりされたることにつれなしとさるひかへして　栄　源氏の
されなとのやうなことをもちつれ給ふと也
これもめづらしき心ちそへし給ふ頭中将ハこの君の
細　花色も様かはるとて面白ぶかひ給ふ也
ゆるかまめなることゝもくとして常にとり紀給ふかたへさこゑと体
まぎれて　細　実蕩といひて行也と云也　栄　源のゆくにもと

ききたるに子なく頭中将と好色の人にてまさる給ふと也
うちとけぬ思ひ給へく御覧あるをとりて見んとあまたにさんとのさ
思ひわかるゝにこれを見つきてあるきさくちからとかれしら御おり
にあそうしとし宮して泣ん侍とりてまり好やとはうらんかな
思ひく　栄　源氏のほれなくも好色の心まちたる紙して
内に思ひあるまこと給ひん何くしてかんの心也
名をゆめさる風ひやくくちかきかやうなる事をゆくほどにもと
こゝろとろむやとみゆるもしたまれハやとしらるゝところに
河　頭中将もつきあらくちを初めて源氏の給ひの給ふと給ひる也
思ひハうら給ふにてとまりても給ふまふかうかと宮つき
て此中将とハさひうらにかきされつるもまれる　花　家壺の沾
うそともう給也　栄　源ハうちのもまても給ふま行ハぬと也
きるまかのうちにてもそあるめと御ほさに事をされくもしきさんハり

かくにけなきふるまひをしてみつけられんことはつかしく
られた　河 修理大夫・大夫ハ此職也　細 修理大夫也
此内侍をとりはなくやしく人をとおほさむ也
わつらはし出てなんよ　細 源内侍詞　弄 源氏頭中将と内侍よの逢
くものふるまひハしるかりつらん物を心うくすかし給へる
よとて直衣はかりをとりて屏風のうしろにいり給ぬ中
将をかしきを念してひきたて給ふ屏風のもとにより
てこほ〳〵とたゝみよせておとろ〳〵しくさはかすに内侍
ハねひたれと　河 わかせこくおきよひありけにのくも
のあるまひのくしかりも　細 此人のこゝろきゝたる大う
ねく思ひなれ人さ物とも也　弄 源内侍をとうち語詞也
いくらしなともかやうにて心うこかすおり〳〵
うこくはならひてあらひていみしく心あわたゝし

きにもこの君をいかにしなしきこえぬるにかとわひしさに
河 ふるふ〳〵つとひかへたり也　弄 内侍ハ様たれとうしろを
やたくつれる人なれたんかくは人河まことあるゆへにま
思ふにとかやうに人乃おもふところ有也
あるくはとひくてとるとなれとしくまてゐてあてやと
しとけなきすかたにてかうふりなとうちゆかめ
てはしらんうしろておもふに　細 頭中将をとひくる也　弄同
いとをこなるへしとおほしやすらふ頭中将いかて我と
しられしと思ひて物もいはすたゝいみしういかれるけし
きにもてなしてたちをひきぬけは
あこちなる人し　弄 見んくろしくんと也
女あか君〳〵とむかひて手をするに　弄 頭中将ハ内侍のかゝる事をする逢
ほと〳〵わらひぬへし　弄 ほとんどと云詞也頭中将のこゝろ也

このまゝかくやきてまいてちかしたるうちへいそきけくしもはちなき
れ　栄　内侍かかくらるとはくろやうにてそあれにまゐりつゝ
してさらにあらはれ見らるゝしきのこのかや
五十七八の人のうちとけてうちひさしをあけてひくあら
ぬ　五十七八　細　たゝよふ也
二十ばかりの人たちのはなちて物わらひしたちなとつきなし　二十(ハタチ)　細
くらからぬさまはまたひとあまてわらふをきゝすゝしき
をとみえければ　栄　典侍のとなりあらはれや
中にて見つきるくなれとたちまちあふとけしきを
きちかりしそゝや　細　源ハやうて中将とおもふ也
おもしろかりぬ　河　嗚呼(オコ)　花おかしくしたまる也　河
つらくくたる也
その人あるとみえはよはとわりしられはまちぬ紀

あやひきとこへてひとつてつゝ語つれくれて猶かゝ
栄　汝中将也此源の事つる也
えなくくらしひぬ　栄　てと濁(ニゴル)へし此中将の事也
まてとあさうつんかとよるさちかれはくりやりて此ちくし
さんやの語へハはとるくへてはしにゆうしゆくもそはゆくて
も語ともにうそやて中将のわひをひきとりくぬかる語
色ハぬりしやもまゐりとゝとろひうろうかほとに　栄　現心(ウツシゴヽロ)なく
また語りと諍(イサカ)源氏の腹立(フクリウ)し語也又はの心なと云
心もなし　河　あいとのんうやいる也
万　またろをのうかともれハるのうちるちは乗つまされ
古　はりぬやとんをえてあひをねハはりかれつきくまあてそまき
ほところひハ語くやうちぬ中将　栄　源氏の時移家来の頃と
ろひくあまへのさゝてるをたちぬとハうろ

はしめつかたやりつるもそんなりかくほところなる中の夜なり
細 中将の手也源氏の詞共ひとつとも何もなるへき也
深 源氏のかくのはしつ給ふとも此夜はかくれぬそのくんとも也
さるにとてもさきは志るかくん也いふ人君 細 君のこころはえ此夜下に
こさむかくはもりきこえを志るかくんかを何ところひかるなる哉
しかとうるはきは此ぬそくれあかなりしきとも 河
花同 引歌はれんかれたれは 見花
かくれなきものと志らくは夏夜きたるとうすれ心をつかはし
河 頭中将とまへとハかくれなきはかくさてさとは浅き
心也とよめる也 細 名をもかくれなきものとも非とをしり
しをかくへきをうすれ心をとふ給つ 深 源氏乃詞
其寄也我内侍の夜へかくをしるかく中将乃何かうしふ
きたるハ何さそんとも夏夜とハうすきをいうなる

あかうさとはれハ浅き心との事也
也いひかうてうらやとるれ志ときをなれともうくたにさきこそ
さまてみなみて語ぬ君をいとはかくかんのきそれぬ歌
事也ともひかし給へり内侍ハ何さまにも知しきれハおち
とまれる詞也ぬきこむひるをはしめてなれり
弁 夜人なかくうしやむへき事もなき紳乃契ある事
なれも云事や 細 頭中将とおもひて源語 深 いつれと
志ともとなき人かくたなれをしれかれ心とも
うしみてもいふかひなれ立くれに引かくなかし彼の名訴よ
深 源内侍か詞也立くれにひきてか立かしとハ源氏と頭中
将とのかくるを語と彼よそとくひかうかへて也也
彼乃えんすや 細 頭中将と引はまそて源語也
うこともあしきたと何き 深 みなかくれたるとの心なき也

河細 別るれはそのかしこき涙川底もはかなに成ぬと思へしも
わかれのち後やとみえぬなれと 河 云々 伊勢物語
おもひあへてやうつるなるへし 細 おもひてはせきあへぬ事
也おほせ也 和ハほのあつき也
よそなからうつりしもさすかなく 栄 内侍の心は源中将に
心をうつしてはゝきゝを給ひとかうちなしと也さすかに
ともしもさすかに源氏のとかめ給ふ也
あらそひし給はんにはえたへぬとよそきこえん疎をかくこしきぬ
栄 源氏の君也源中将のあらそひしにハ又はさなり紀行くそ
とも内侍の源中将をとりもとあるは紀もこそかちたまへの
心也源中将を見てうしむへきなる紀なりぬ也 抄 花鳥説也
花 よそきこえん疎をその君にてとかうしむへきやそその人を
うらむへき我心をもちゐさせくるもなかりしと也

その上おんそきるおもひハ中将のありかるるはちなとそしより
はらたちしを見給ふに 花 雑袍聴人(ナヲシヲユルサルヽヒト)若ハ直衣のされとお
ほよそちハあるなれとれ世も直衣(ニヨウ)の説おもひハ法門なれとも
乃きされとまちひ給ふ用の事をかしそて二藍(フタアイ)あるもひハかる
おもを年よりもそて着(チヤク)と源氏宰相(サイシヤウ)中将うすニあひの
色あり頭中将ハ年もまけられとくらんひきくにより
てむ紀二藍ひの事をしもと着用(チヤクヨウ)もへし宮乃色より紀ハ
宿徳(シユトク)のこととおもひらん乃説さハわうき色とおもちい
給ふしひやあられうしき年さにくらぶると宰相中将のお
なしのるは源氏乃君の給とて非参議(ヒサンギ)の時とちあふとな
きわうへとそ二あひへおきれとの説くう非参議とハ二位
三位なりとの中将をと云もそてまた昔ハ八座(ハチサ)に昇殿(セウシン)とし
給るすまれハなれとの事細しき給へきと云んもさらに

のうへに源氏のあひとうすき二つにあひたるあひの色をそへたま
つられてもあれど宰相中将ハあかき二あひなれハ我色なるをし
よきといふことかはる也直衣(ナヲシ)ハわひまト下襲(カサネ)ハ
色をゆるさぬ禁(キン)色(ジキ)の人のハ蘇芳(スハウ) 面白裏 蘇芳 赤色
四位以下ハ緋(ヒ)殯(サンキ)人のハ躑躅(ツヽジ) 面白裏 夏ハ二藍(フタアイ) 穀 ありき
今も直衣をとるはとの人をあらため又をもちい
あらためさぬ人をも下襲の色をも用へきる事なる也直衣
きる人の下襲乃ことを用色をき事たるを直衣きる
人の下襲を用るハ略義とそ見えける 細 わひハうすし
のさまをもちゐるも源のあをハ中将のをこまかにも花
る源氏を宰相中将とあるはうちやまうつる也此時ハいま
た三位乃中将也未宰相にもなりしかハそのことも
栄 直衣をも掃る事ハ此時のさまにかなへてあひをとる歟
とらへど老翁(キヲ)揩する事也わかきハ二つなるのあいの年
なれけるはまれなるのうち也宿徳(シユクトク)とてよき人歳の位ハう
すき二藍(アイ)をとるも也源氏ハ三位也ゆへにうすき宰相中将
なるゆへにこき二あひをとる也二あひハはなとあるをや
をそめてそむるといふことありやあるたかんあるへし
こき袖をもおほきてあやしれるともやわらかにたちてみる
なへ人々 細 鰭(ハタ)袖もある説ハ辞(コトバ)也将(ハタノこ)字也こゝは不用之
むへなつかしきるも物ほうらんといとは人かきあり
逆語 栄 理(コトハリ)なるまつしさいと云心也
中将もの女ハかしこに 栄 宰中将清どのおもし身し秋の物も
これまでともつきしを物へそとてまきせしめる
をしへとなりつうん也心やまし 花 源乃直衣のちこ袖也
栄 宰中将の前あるとし源氏乃あさきのちこ袖を宰中

ねよりまさりつゝせらるゝや
此おもひとんちかくまうくえぬ御目をも　細　此おもひあるくてハ
源の内侍也　聞　内侍すまうと此ほ中将也おもひをまい
らせ給ふとやうれしきよ内侍源の知也
そのいろ/\ことふく　聞　さおもひあかくとまさや
中たえしかたにとやおもひておやうさまえるあるし此常ハとうてさいはら
河　これハ託(カコツ)やうにてれやきんといふや恋の事をもつくてたへ
ぬる中とかこてんやあるも　花　石河のこまうとにおもひ
とらへまてうしきらひたるかくれるおもひそこなれくれ此
おもひの中ハおもしたるさいばら石川　と葉常をくまどられ
さまるハ石川のこまうとこ又東絡のみちれなそてたる
知らちおもひかことをろうもはづむとそこふとおまきも
おもひまうしとハよをありたゝし知らちあひうことや

きこしのうすの知也いなの哥也ことをかこつハとくに
え給ふ中将のおもひハこととハ二藍よりとも哥に花
田のおもひとのまろえあまりて給ふうへ石川のこまうど
まとうし桂をかたくそのさまよりとかて先給ひ引
中将の返哥ふと思よう知らさとられあるとたひく
てたらしぬる中やよめるとも石川の曲(キヨク)をとらふもたるとと
きこえ給ふ中将の返哥ハ内侍のまをとられも知人
あるにより文奥(ブンヲウ)してある知也　細　催馬楽(サイバラ)乃石川をひく
也恋ハ花田なしねともとうていふ也かとなうこ何也
此中将と内侍の中をやの中をいふ也　聞　源の清哥也
内侍と此中将と此中縁ハうこ何ことを知らすや必ておもひ
とも源氏ハとらまし乃縁をねとも也
やて歴の縁ふうちのあて　聞　源氏よりもこれ清哥乃返

事をやめてし給也

思ふかく引とられぬる常夏ハかくて絶ぬる中とかこつ覧

細 ゑ中ハそれ／＼へひきとられてたえもてゆく也

宗 頭中将の返事也これを内侍と我との中絶ハ源氏乃

常夏をひきとりまゐらせゆへと源氏をうらみ給ふ心

世乃常也

えのがれさせ給ハじとおもひまゐらせてとのく度上まいらせ

思給へりしとおもひ給ふさま度しておもひまゐらせ給ひ乃

思ひもしとおもひしそれと 宗 源氏の御返事也

おもひやまずとおもひけくそのしる頭自かく 花 頭中将の貴

前まゐるによりて蔵下乃ありさまを申ルといふ也 細 上ニ参

守もりる也下へひとくうすき也 宗 まちまちれ又の翌日

のさ度也 此説よろし

いとう御さしをさくよろしきと見るとかくさしほく色めき

殺人かくさしうまて 宗 源氏も頭乃君もきうし紫の

うちを心にいふちゃうとくすまたるはまをさ給也

物かくしハちまし給ぬらんかやていと頭をまたるまちめなり

細 頭中将の詞也

たまとうけしとはしんまちあつしうるはきん人にそいとわし

それ 細 源乃詞 宗 源氏の御詞也中将しそいとわしそれと也

まことをそよや世中よとにひはれもて 花 古事此詞にへし

可分證 細 引寄来勤只世間を観するる也 第同

かとこれ山なるとかくこしくちうきん給へり

細古 大上の夜乃山なるいさやはいさとおもへて我をたくまそれ

花 人乃やとゝもたしぬよしとおもへてうきれはすれとらる

ハくちくさめきまるん也

なくそのくちはゝともとれハ宮とのはつてあさくにひさしかるあれ
くさくひらるゝと　細　ひさしきとおもひたし給也
いとしたもつしきへ中へ也おほしきこゆる人しきハ名にハ
也えんようくもかゝるとうしらとつひあり給さ給ふ
栄　内侍ゆへと源氏の御心給ちもとや此内侍をまいらの批判
あり内侍ハ源氏と内侍と也
中将ハゆう也のえみとも也まし〳〵てなきくたるへきこれ宮との
細　葵上也　栄　葵上の事也内侍かくるゝとも中将ハかくる給
そて自然の時源をおとさんとの心也
時としるくさんせんとそいひある　花　自然乃時おもちなき
親極ませんやいふなる也
屋へとちるに清ちく〳〵れはすまちかゝるうへの御まてなし
の出まれきますまゝへつゝるまて　細　此已下ハ所さくてなん

といますてなうしの也也　栄　源氏乃御出抄なる也
いとらとしにはゝま也事らも給へる　河　不と有也　栄　清まへし
あれとも中ねとも源氏をと清への大切におほしめす名にハゆへに
とのく座をはなるゝ給内まんしやく思給也
此中将ハさうくにとしきさまつしや也われき事まつまさそとも
細　うれしくと源氏ハ不ひ花に紅也此中将ハ清とちるゝ也
ふひつとくみ中の給　栄　何ハしとひ給との心也
こゝ乃えひとつもうきめえ乃清ひとつゝしくあり中
栄　葵上也此中将ならぬと一腹也
清かの清くに〳〵ふちうにしてたかれ思とも給ろしおとく也
宮のかれと御清しふとちうかゝゝみてもしみかく又ちうかうつまり
多あるかなかみちかへるをとらふへきさえや御清しもなる中へし
栄　源氏のことや此中将とも御清うてとらうる大臣の清みてと

みこの母宮ハ后の宮にましまさハこれハおとるましき也
人々もとの女御さうしさるとてのひくゝ給ふとおもはるゝ
事もひくゝ御心得あるゆへ后にたつへきものゝやうにもあやしかり
しかり 栄 次中納言也 横将も可然調はろつにまさりひかる
人とも源氏にも似らしておとらぬほとの人といへり
されとも后さくてあらん 栄 まへの若式アク源氏次中納言との
おしらるゝひ給ふとおほしまさ給ふやうに給はしらてのね
むねの心也
それとし七月にそ后に居給ふめりし 花 夜壺の女御中宮
に立給ふ也 哥 延喜立后皇太后藤温子昭宣公女寛平
細 九八 廿六 中宮昌泰 二十七廿三 皇太后班子女王 光孝后 宇多母
夜壺の女御中宮に立給ふ也 河内本には十月とあり七
月可然也 是は八皇太后夜温子昭宣公の女むすめ也

寛平九年七月中宮に立給昌泰二年七月皇太后
さうと見ゆに様して出給ふへし御有七月可然也
源氏の君宰相にて御取つかさにむさと給へんの給へは
かひらうおりて 細 これらも源氏也 宰相中将也
栄 中宮に立給時宰相中将になり給ふ也
此月源氏を給ひて二ひ中とさを給ふ 細 夜壺此法服のかな
とうしろさま給へきん后を後 栄 母方此蔵人はある人のこと
御まの心也
法ちからさみそ見んと三ちみゝ源氏の御心やをさとと思ふと
給ふを見ちきちかしねハ 河 かゝ女
みくん后にて御うしろを人さとするとむ也 冷泉院の法 昌泰 二三 親王の御ち
右大臣継有判官 北 兵部卿の宮なとのきよ也 栄 寛平 源氏御段
源氏ハ親王たち源氏の姓を給ふ也 元源氏にあらはそ

そく宮をとさにうとさとうれはうしにたとえたまりてはゝうへに
せめ給をてまゐらせ給へ　箋 梅壺中宮に立后へも給ふ
ちとせをさふにまいれハわか宮の御うしろみれ給はは
てみとは宮の御はしめ給とや
ありさてんをいとゝはゝうえ給ふ心もとなきまゝなり
細 こうきてんをはしたまてはとみなん人の心也　箋 梅壺の
后に立給へきあらまほしき中宮ふたゝひ立給はぬ人也
されと春宮の御母にてかたらはめ給ふるひる給ふ也
花 朱雀院の位乃あるも
御はしめのとめよとうせ給も給ふ
うち給りんみく后に立給ひぬはんとすくさめ給へと給ふ
乃御孫也
もとに春宮の御うまれて大きに給へるに女御給へるを給ふ

ありてハ　細　大饗年と喜にうむ人
ありさまをめつらしきこと給ひうしも　箋 ありきさてん
よりうして梅壺后にたち給ふとのゝ御事也　別春宮の御
位に給ひ行へハ御母后にやうて立給ふと也　それと思
太后にかゝりとかや御孫に御なりまも八太皇太后になりとや
生れやうくしたん人と思のある也　箋 ありきさてんかの人
也梅壺をそろしき心にはいとちにをハ生へとうちうやうに
引かして后に立給ふハよれなるまゝおぼへる也こそれを
ゆるしてしろしめすまて
ありて給ひの給とまみ事おの君とはうらまいり給ふあれ
し后と思ゆうなりみと　まいり給　細 中宮入内也
きさいちうしみかとの御うへやうさてそくひらうれ給ふれ
御しに給人御一給へハ人をいとふとに給ひつき思のした

里　きこえたまひし○これ冷泉院の御事
まし奉りしをさす院也　細　源也
はらからのうちをもおもひやりていとゝとよひすくれたちも
しられたに　河　伊勢物語二条の后の御息所とかや
ある時氏神にまうて給ふにこの心はりさしたてまつりしひ
きりおもされ　大はらや小塩の山もけふこそは神代の
ことも思ひいつらめとよみしをやさまんとく
思はんかしとさしてこそ　栄　此段よくさしたに心あるへし
業平を后によせしあひ給ひしをとは清きまして其
てよめり　花　中宮の御絵なれは鳳輦にたてまつる華をも
読まれ文庭けのいとかきしも北車に乗給ふ時をいふ也　佛家
乃人々の行粧をもみよまてうらやむ事也
そう絵にしさまてすむ　細　とひきりしよりとと云さ海よ

や　栄　源乃御心のうちにとの心也
はまさとせぬ人のやうにならてこれ雲井にのぼるにつきてくも
花　心のやすからぬハ中宮の御方を思ひ給ふ心あるへし
細　人乃やうとハ中宮の御事也雲井は人をとふ御事也
栄　源の御心也中宮のまへ立給ふを宮のかたにかよふとハよめる御意
と思ひなるゝ人のやうな事也
世のおほえもかされて中宮と哀なりみるハおよひかたき御
月日よ立てひとくいとなりまいりしをはそるゝ紙
みえ　栄　冷泉院の御事也
宮ハとうるしをおはせと思ふる人をさへなめりし
細　源よ此宮乃よ給ふ也
きたへゝ清きにけらまくろもてかはとくね清ありき海は世に
いて給ひし給ハまし　栄　源氏無双（ブサウ）の御ぐるちにて宮のまへ

なく源氏に物語ハ畢ぬとゞまりて世に是生物語そ
せうそこんこうらんや落着なる事とつくりさくハや
うにおもくぬくちうち世中に物語りんとの外也
月日の光さうとよわらくにうつくしひあるやうなそ世の人ゝもしら
細
これを源氏ハ物語といふや　栄　源氏と云へ宮とハ佐
く月と日との光さうとうなるやうやと世中此人田
ひかる君也